

トイレの出口まで来たとき、後ろで小さな音がした。

「ん？」

平尾が反射的に足を止め、振り返った。

「どうしたの？」

彼の横から美佐子が訝しげに問い掛けてくる。

「いや、何か音がしたみたいだが……」

平尾がトイレの中に視線を巡らせていく。

目が、さっきまで自分たちが入っていた個室の一つ向こうの個室のドアの下の隙間に、中に落ちているポーチを捉えた。

平尾は一瞬息を飲み、素早く考えを巡らせる。

ここで騒ぐな、あの中の生徒を見つけだす方法は後から考えればいい、今は……。

次に平尾の口から出た言葉は、いたって平穏なものだった。

「思い違いみたいだな、別に何でもないか」

言いながら、平尾は隣的美佐子に目で個室を教える。彼女もすぐにポーチに気付き、驚きに体を強ばらせるが、事情を察したのだろう、彼に調子を合せた。

「そうみたいね、きっと風か何かだったんでしょ。じゃ、早く行きましょよ」

「ああ……」

平尾が応じ、二人はトイレを出ていく。

その時の平尾の表情は厳しく強ばったものだった。

\*

「あれ、あのまま戻ってこなかったから心配してたんだよ」

制服への着替えを済まして教室に戻った麻美に、広瀬 薫が声をかけてきた。

既に昼休みに入っている教室は閑散としており、周りでは数人の生徒が弁当を広げているだけだ。

「うん、ごめん、ちよっとね……」

言葉少なに応え、麻美が自分の席に座る。

「本当に大丈夫？ 何だかぼんやりしてるし、顔も赤くなってるよ」

「えっ！ そんなことないでしょう……」

「へえ、さては何かあったな」

麻美の慌てた様子に何かを感じたのだろう、薫が悪戯っぽい笑いを浮かべて席から立ちあがる。その腰で、元のスタイルに手を加えて、短めに仕立て直した制服のスカートがひるがえった。

「隠したってダメだからね、麻美って顔に出ちゃうんだからさ、すぐに分かるんだよ」

「そんなことないよ、ただ、ちよつとさ……」

「ちよつと何なの？ ほら、正直に言いなさいってば」

「本当に何でもないので、ただ、まだ気分が悪くて……それだけ」

「ふくん、そっか、じゃあまあ、そういうことにしといてあげようかな」

そう言いながらも、薫はどこか見透かしたような目を麻美に向けている。

薫ったら、いつもこうなんだから、と、麻美は思う——同級生であるのにも関わらず、薫は麻美に対してよく年上ぶった態度を取るのだ。

確かに見た目も性格も派手めな薫は、麻美に比べると大人っぽく見える。そしてそのことが、背伸びを試みたい年頃の麻美にとってはいくらやましくもあるのだ。

「もう！ そんなことよりもさ」

話題を変えようと、少し強い口調で言い、麻美が薫のスカートを見る。

「またそんなの穿いてたら、校則違反だって叱られるんだから」

「平気平気、だってこっちの方が可愛いんだもん。それにさあ最近じゃ平尾先生も何も言わなくなっただしょう」

さつきまで問い詰めていたことも忘れて自慢気に応えた薫の態度に、麻美がかすかな疑問を覚える。だけど、平尾の名前を聞いた途端蘇ってきた記憶が、そんな思いなどすぐに消し飛ばしまった。

「そ、そうね……そう言えば、最近先生……」

「でしょ。だからさ、麻美も校則なんて適当にしといてさ、もっとオシャレして男子の気を引かなくっちゃ。麻美って元はいいんだから、きつとモテると思うんだけどなあ」

「だって、わたし、そんなのは……あんまり……」

「ほらほら、すぐにそれだもんな、麻美って本当に臆病なんだから、そんなんじゃ毎日楽しくないでしょう？」

「それは……。でもさ、やっぱりわたし、そんなのって……」

「まっ、仕方ないか、それが麻美だもんね。わたしなんてさ——」

「え？」

「ふふっ……。ううん、何でもないよ」

薫が、優越感の笑みを浮かべて椅子から立ちあがる。

「じゃあ、わたし食堂行くけど、一緒に来ない？」

「ううん、お弁当持ってきてるから」

「あつ、そうだったよね。でもさ、よく毎朝自分で作れるなあ、感心しちゃうよ。じゃあ、行ってくるね」

薫がからかいをこめた言葉を残してドアへと向かう。その、ピップの形を浮かびあがらせている短めのスカートからは、白い太股が覗いていた。

## 【2】

バスルームから聞こえてくるシャワーの水音が部屋の中に響いている。

一応、掃除もされ片づけられてはいるのだが、どこか雑然としたところを感じさせるマンションの一室。

ソファと小さなテーブル、その前に置かれた十七インチのテレビを組みこんだオーディオセツト。本棚とパソコンの乗った机が置かれたリビングルームからは、アコーデオンカーテンで仕切られた狭いキッチンが窺え、寝室と、トイレを兼ねたバスルームへと続くドアが見える。

そんな部屋に一人でソファに座っているのは平尾だった。

彼は、夜景を見させている窓に焦点の失せた目を向けて、昼間の女子トイレに居た生徒のことを考えこんでいた。

噂になりだしてからじゃ遅いからな。早く、あの生徒を見つけださなけりやマズイことになっちまう……。

でも、どうやって？

下手に騒げば、逆におかしなことにもなりかねないしな……。

シャワーの水音が止まった。

少しの間があり、バスルームの引き戸が開く音がし、続いてフローリングの床を歩いてくる足音が平尾の耳にとどく。

彼の座っているソファの前のドアが開いた。

「あれ、先生ったら、またそんな顔してる。せつかくわたしが来てるってのに」

半分ほど開いたドアの向うから顔を覗かせたのは薫だった。まだ湿っている髪が不満そうな表情を浮かべた顔を縁どっている。

「ああ、そうだよな……」

考えを中断されて、苛立ち混じりの声で平尾が答えると、薫が無理に笑みを浮かべた。

「でもさ、すぐに元気にしてあげる。ほら、言われた通りにさ、先生が買ってくれた服に着替えてきたよ」

ようやく興味を引かれて、平尾が薫に向き直った。

「じゃあ、何ぐずぐずしてるんだ、早くこっちに来いよ」

「うん……。でも何だか恥ずかしいな。だって、この服って凄くエッチぽいんだもん」

「だからいいんだじゃないか。ほら、早く来いって」

「仕方ないなあ、フフツ……先生って本当にエッチなんだからあ」

薫の声にこめられている含み笑いを聞き取ると、平尾が心の中で舌打ちする。

チツ、喜んでやがる。もう少し嫌がる素振りでもあれば可愛げもあるんだがな。

まあ、こいつにそこまで求めるのも贅沢ってもんか。こいつほど楽に落とせた女も珍しいからな。

ドアが大きく開き、薫が全身を平尾の前にさらけ出した。

「どう？ 先生、こんなの見て感じる？」

薫は裸の体に、上下一続きになった網タイツでできたボディーストッキングを着けているだけだった。首から上と両腕以外の全身にぴったりと張りついた黒く目の細かい網目の生地が、まだ成熟には一歩足りない乳房の膨らみや胴の括れ、腰の曲線から続く太股と脚のラインを強調している。

「ほら、みんな見えちゃってる……」

薫が、昼間教室で麻美に向けていたものよりもずっと大人びた笑みを浮かべながら、網目を通して透けて見えている乳首に手を触れ、もう片方の腕を、本来ならば同じく恥毛を透かしているはずの無毛の股間にあてがう。

「それにさ、ここだけ穴があいてるんだもん、こんなのエッチ過ぎちゃうよ……」

薫の精一杯に誘いかけている口調の声を聞き、平尾が内心で嘲笑を浮かべる。

彼にとつては薫がいくら大人びた素振りを見せようが、所詮は、憶えたてのセックスと、男とのいちやつきに好奇心を膨らませている子供の背伸びにしかすぎないのだ。

平尾が薫に調子を合せて応える。

「シャワーで綺麗に洗ったのに、もう汚してるんじゃないだろうな？」

「汚してるって……。先生のエッチ……」

クスツと小さく笑い、淫らな期待に瞳を輝かせる。

「ねえ……。調べてみたい？」

「ああ、検査してやる。ほら、ここに来いよ」

「うふふっ……。はい、先生」

平尾が示した彼の前のテーブルに、薫が歩み寄っていく。

黒い網タイツを張りつけた尻をテーブルの上に乗せると、さすがにおもはゆいのだろう、薫が平尾から視線を逸らせた。

「どうした、脚を開かないと検査できないぞ」

「だって……」

「言い出したのは薫だよな。今日は、薫のアソコと顔をじっくり見比べてやるよ」

「もう、またそんなこと言ってイジめるんだから……」

「ほら、早くしろよ。それに、ちゃんとツルツルにしてるかもチェックしなきゃいけないしな」

「えっ、ちゃんとしてるよ」

「だから、それを確かめるんだ」

平尾が薫の両膝をつかんで押し開く。ほとんど抵抗無しに広がった太股の中央に、幼女のように剃りあげられた秘部が剥き出しになった。盛りあがった二枚の白い柔肉を縁どる黒い網タイツに開いた穴が、その淫らさを強調している。

「ねっ、言われた通りに、ちゃんと綺麗にしてるでしょう」

恥ずかしさを誤魔化す為に強めた口調で言う。

「ああ、可愛いよ、見事にツルツルだな。毎日ちゃんと剃ってるみたいだな」

「うん……。一日経ったらチクチクしてくるから……」

「つまり、夜になるとパンティにこすれて感じてくるって訳か。よし、中也調べてやるとするか」

平尾が薫の股間に指を伸ばすと、彼女が少し体を後ろに反らせて、両手をテーブルにつく。

「ほら、もっと股を広げろよ」

「うん……」

M字形に開いている太股を更に大きく広げ、薫が股間を突きだすような恰好になった。

まだ処女の面影を残している薫の秘部は、綺麗な曲線を描いてふつくらと盛りあがっており、外側の肉襞もその合わせ目をぴったりと閉じている。

平尾が指の腹で、無毛の柔肉をぞろりと撫であげた。

「あんっ……!」

「で、どうなんだ、剃ってる時には変な気分になるのか？」

「えっ、そんなこと……」

広がった内腿の腱がピクンと震える。

「う、うん……。やっぱりき、エッチなことしてるんだなって思っちゃうもん、先生のこと考えちゃうもん……」

それが狙いだからな。平尾が満足げに微笑み、指先を柔肉の合わせ目にあてがう。

「それでエッチな薫は、そのままオナニーするんだろう？」

「……うん、しちやうの……自分で弄っちゃうの……」

「その時は何を考えるんだ？」

「先生のこと……。先生が、今シテくれてるみたいなこと想像するの……」

平尾が柔肉を左右にめくり、指を差し入れる。

「あぁっ！」

ねっとりりと粘ついた薄く繊細な造りの肉——小陰唇の手触りが指に絡まり、奥で膣口がキュと収縮した。

「やっぱりだ、もう中はヌルヌルだな」

「だって先生の指、感じちゃうんだもん……」

平尾が繊細な肉襞を撫で、続けて、膣口にごく浅く埋めた指を小さく円を描くように動かしてはじめる。

「あつ、うっ……んっ、気持ちいい……あんっ……かんじちゃう……」

半開きになった唇から熱く吐息し、太股を小刻みに震わせながら、薫が手を乳房に伸ばし、黒い網目の間からピンと突き立っている乳首をつまんで愛撫しはじめる。

「誰がそんなところ触れって言ったんだ。ほら、もつと弄ってやりやすいようにオ○○コ自分で開けよ」

「だって……」

どこか悲しげな声で応えた薫が、それでも股間に両手を寄せて、柔肉を左右に割り広げる。

内側の粘膜が艶を放って張り詰め、トロリと零れた欲情の蜜が会陰に濡れた線を引いた。

「イヤらしい汁が溢れてるぞ」

平尾が、したたりを指にまぶし、剥き出しになった秘部の内側をグチャグチャと撫でまわす。

「あぁっ、もつと……。先生……もつと弄って……」

薫が更に大きく柔肉をめくりあげ、腰を突きだす。

膣口周囲の肉の凹凸までがさらけ出され、そこを弄りまわす平尾の指は透明なヌメリに濡れ光っている。

「先生……上も……。あぁっ！ ねえ、もつと上、いっぱい感じるどころ、クリちゃんも、クリトリスも触ってえ……！」

指を誘って薫が尻を揺すりだすと、平尾が膣口を深く一気に貫く。

「あうんっ！」

ギュと窄まり、絞めつけてきた膣穴の感触を楽しみながら、平尾が内壁をこすりあげる。

「違う……違うよ……そこじゃないのに……」

「中で感じるのが大人の女なんだよ。薫ももつと勉強しなくっちゃな、膣でイク方が、クリトリスよりずっと深くイケるんだぞ」

「だって……だって、欲しいの。お願い弄って、クリちゃん弄りまわして欲しいの……」  
「聞き分けのないやつだな」

「あつ！ ダメッ！」

平尾がズルリと指を引き抜き、続けて命じる。

「つぎは尻を見せてもらおうか。尻の穴の周りの無駄毛もちゃんと始末してるか確かめてやらなくっちゃな」

「意地悪……先生のいじわる……」

薫が、悲しげな声を漏らしながら、やっと体が乗るほどの大きさしかないテーブルの上で懸命に前屈みになり、腰からまわした両手で左右の尻たぶをつかむ。

「どうした、そんなんじゃないだろ！」

平尾が、黒いストッキングをびったりと張りつけている尻をピシヤリと平手で打った。

「あんっ！ ごめんなさい……」

薫が深く体を折り曲げる。

「お尻なんて、恥ずかしいよ……」

膝を滑らせて股を思い切って開き、尻房をつかんでいる手に力をこめる。割り広げられた厚い肉の狭間の奥にくすんだ色の窄まりがさらけ出された。

「よし、まあ、いいだろう」

平尾が、目の黒いストッキングに開いた穴から剥き出しになっている二つの秘部に視線を這わせる。

肛門は、周囲の肌よりもわずかにくすんだ色の小皺の奥までも綺麗に剃りあげられており、その下の秘部は、内腿に引かれて柔肉を広げ、内側のヌメついた濃い桜色をした粘膜を覗かせている。

「よしよし、尻の穴もちゃんと剃ってるな」

視姦を終えた平尾が、秘部から垂れている愛液を指先に拭い取り、尻穴に触れる。

周囲の小皺のザラつきと、奥の肉の輪の生ゴムのような弾力を楽しみながら、撫でまわす。

「ああっ……。いやあ……」

「尻を弄られるのは、まだそんなに恥ずかしいか？」

「だって……だって、変なんだもん……お尻なんて変なんだもん……」

涙声のようにかすれてはいるが、その中にはつきりと欲情の色を覗かせている薫の声に、ほくそ笑んだ平尾が、塗られた愛液に粘つく尻穴を執拗に弄り続ける。

「おい、尻を検査してもらう時はどうするんだった？」

「あつ、は、はい……」

薫が息を詰めると、肛門が周囲の小皺を広げて内側から盛りあがってくる。

「そうだ、よくできたぞ。そうやって、隅々まで全部見せるんだよな」

平尾が、肛門の中心からわずかにはみ出している赤い肉を掻き分けて指を埋めた。

「ヒッ！」

薫が、短く甲高い悲鳴をあげ、秘部が窄まる。

同時に収縮した膣穴から絞り出されてきた愛液が、長い糸を引いてテーブルにしたたり落ちた。

「なぶって……お尻も、アソコも。先生、お願い、わたしをもつとなぶって」

薫が尻を突き出し、開いた股間で熱く火照る二つの秘部を平尾に差し出した。

以下、次回へ